

報道各位

2026年1月27日
公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館

エttore・ソットサス —魔法がはじまるとき、デザインは生まれる

2026年6月23日[火]—10月4日[日]



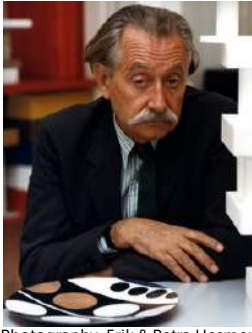
エttore・ソットサス《カールトン》1981年（デザイン）/1981年（製作：メンフィス・ミラノ）、
石橋財団アーティゾン美術館 © Erede Ettore Sottsass

公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館（東京都中央区、館長 石橋 寛）は、「エttore・ソットサス —魔法がはじまるとき、デザインは生まれる」展を開催します。

エttore・ソットサス(1917-2007)は、20世紀イタリアデザインにおいて世界的に知られる巨匠です。1950年代からオリベッティ社やポルトロノーヴァ社のデザイナーとして数々の名作を生みだし、1981年には国際的なデザイナー集団「メンフィス」を結成して、しばしばポストモダンと評される革新的なデザインで一世を風靡しました。

ソットサスは過度な合理性の追求に疑念をもち、人々の生活に自由に生き生きとした感性を取り戻そうとしました。斬新でユーモアあふれるデザインによって、現代人の生活、人生、ひいては運命を明るく照らそうとしたのです。

近年、石橋財団では新たにデザイン分野の作品収集にも注力し、ソットサスの初期から晩年におよぶ100点を超えるコレクションを形成しました。本展はこれらの作品を一挙に公開する日本初のソットサスの大回顧展であり、また当館初のデザイン展です。



Photography Erik & Petra Hesmerg

エットレ・ソットサス

1917年オーストリア・インスブルック生まれ。1929年に建築家の父の仕事の関係でイタリア・トリノに移り住む。1939年にトリノ工科大学で建築学の学位を取得、第二次世界大戦従軍後、ミラノを拠点にデザイナー・建築家としての本格的なキャリアを開始。1950年代から60年代にかけてオリベッティ社やポルトロノーヴァ社のために名作デザインを次々に生み出し、その名を知らしめる。60年代後半には世界的な反体制の機運をうけた「ラディカル・デザイン」の潮流の只中で、東洋美術やポップアートなどに着想を得ながら極めて斬新な創作を行った。70年代前半にはミラノでの仕事を突如中断し、スペイン・カタルーニャ地方の荒野を放浪しながらコンセプチュアルな写真を撮影して過ごし、「デザイン」とは何かを哲学的に探求した。80年代には自身が発起人となって国際的なデザイナー集団「メンフィス」を結成、大胆な色彩と形態によるデザインの数々でセンセーションを巻き起こした。85年頃にメンフィスを離脱して以降も遊び心溢れる挑戦的なデザインをつくり続け、2007年に90歳で没した。生誕100周年の2017年には欧米の美術館を中心に大規模な回顧展が開催され、その評価はますます高まっている。

【見どころ】

1) 国内初、エットレ・ソットサスの大規模回顧展

ソットサスは20世紀イタリアデザインを代表する存在であり、近年では欧米を中心に回顧展が数々開催されています。しばしばポストモダンと評されるそのデザインは、合理性や機能性を追求するのではなく、人間のより本質的な感性を揺さぶろうとする新しいデザインであったと言えるでしょう。その革新性は同時代に大きな影響力を持ち、今なお私たちに新鮮な驚きを与えてくれます。また、ソットサスは倉俣史朗や立石大河亞など多くの日本のデザイナー、アーティストたちと交流し、たびたび訪日して日本の文化にも親しみました。ソットサス率いるメンフィスのデザインは、日本のデザイン界にも大きなインパクトを与えました。ソットサスの没後20年を間近に控え、そのデザインの全体像を振り返り、真価を問い直すべきときを迎えています。本展は、ソットサスの初期から晩年にいたる100点以上の作品に倉俣やミケーレ・デ・ルッキといった盟友たちの作品を加え、ソットサスの創作の軌跡を紹介する国内初となる大規模回顧展です。

2) ソットサスにとっての「デザイン」に迫る

ソットサスはそのキャリアを通して、従来の考え方に縛られずに「デザイン」とは何かを問い続けました。古代から現代まで洋の東西を問わず芸術や文学に親しみ、また同時代の政治・社会に対する鋭い批判精神を持ちながら、現代人の生き生きと喜びに溢れた人生のために必要なデザインとは何かを追求しました。合理的であることや機能的であることといった従来のモダンデザインのあり方に囚われない自由な創作の姿勢は、本展のサブタイトルでも参照されている、魔法がはじまるときにデザインがはじまる、というソットサスの言葉によく表れています。本展では、ソットサスによる「デザイン」とはどのようなものであったのかに迫ります。

3) 石橋財団所蔵の 100 点超えのソットサス作品を一挙公開

近年、石橋財団ではソットサスの作品を重点的に収集してきました。ジャンルは家具、セラミック、機器類、ガラス器、写真、ドローイングなど多岐にわたり、現在100点を超える一大コレクションとなっています。ユニークな形態と斬新な色づかいのキャビネット、高さ3メートルにも達する陶器を積み上げた柱状のオブジェ、大胆な構造と繊細な美しさが共存するガラス器、「デザイン」を問うコンセプチュアルな写真作品など、ソットサスの唯一無二の創意を存分に堪能することができます。本展は、当館が所蔵するソットサス作品および関連資料を一挙に公開する初めての機会であり、アーティゾン美術館初のデザイン展です。

【展覧会構成】

1. 1950～60年代：オリベッティとポルトロノーヴァのためのデザイン



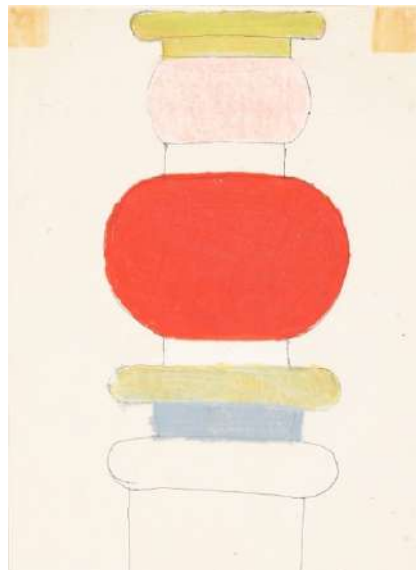
上段左. エットレ・ソットサス《二段組みのサイドボード (Model MS. 120)》1959年 (デザイン) / 1959年 (製作: ポルトロノーヴァ) 石橋財団アーティゾン美術館 © Erede Ettore Sottsass

上段右. エットレ・ソットサス《ヴァレンティン ポータブル・タイプライター》1968年 (デザイン) / 1968年 (製作: オリベッティ) 石橋財団アーティゾン美術館 © erede Ettore Sottsass, JASPAR, Tokyo, 2025 C5248★



下段. エットレ・ソットサス《サイドボード (Model MS. 180)》1959年 (デザイン) / 1959年 (製作: ポルトロノーヴァ) 石橋財団アーティゾン美術館 © Erede Ettore Sottsass

2. 1960年代後半～70年代：ラディカルな時代



上段左. エットレ・ソットサス《スーパーボックス (グリーン/グレー)》1966年 (デザイン) / 1968年 (製作: ポルトロノヴァ)、石橋財団アーティゾン美術館 © erede Ettore Sottsass, JASPAR, Tokyo, 2025 C5248★

上段右. エットレ・ソットサス《オダリスク・トーテム》1964-66年 (デザイン) / 1986年 (製作: ミラビリ・アルテ・ダビテール)、石橋財団アーティゾン美術館 © erede Ettore Sottsass, JASPAR, Tokyo, 2025 C5248★

下段左. エットレ・ソットサス「メタファー」シリーズより、1973年、石橋財団アーティゾン美術館 © erede Ettore Sottsass, JASPAR, Tokyo, 2025 C5248★

下段中央・右. エットレ・ソットサス《トーテム・ドローイング》1964年、石橋財団アーティゾン美術館 © Erede Ettore Sottsass

3. 1980年代前半：メンフィスの時代



上段左. エットレ・ソットサス《カサブランカ》1981年(デザイン) / 1981年(製作: メンフィス・ミラノ)、石橋財団アーティゾン美術館 © erede Ettore Sottsass, JASPAR, Tokyo, 2025 C5248 ★

上段右. エットレ・ソットサス《マラパール》1982年(デザイン) / 1982年(製作: メンフィス・ミラノ、ピトッシ)、石橋財団アーティゾン美術館 © Erede Ettore Sottsass

下段左. エットレ・ソットサス《マンダリン・テーブル》1981年(デザイン) / 1981年(製作: メンフィス・ミラノ)、石橋財団アーティゾン美術館 © Erede Ettore Sottsass

下段右. エットレ・ソットサス《アルコール》1982年、石橋財団アーティゾン美術館 © Erede Ettore Sottsass

4. 1990年代以降：晩年



左. エットレ・ソットサス《キャビネット No. 71》2006年（デザイン）／2006年（製作：ギャラリー・モーマンス）、石橋財団アーティゾン美術館 © Erede Ettore Sottsass

上段中央. エットレ・ソットサス《花瓶 no.4》2006年 上段右.《花瓶 no.10》2006年 下段中央.《花瓶 no.16》2006年 下段右.《花瓶 no.17》2006年 石橋財団アーティゾン美術館 © Erede Ettore Sottsass

【関連プログラム】土曜講座

2026年7月18日〔土〕

第1回「時代の道標、エットレ・ソットサスの人生とデザイン（仮）」

講師：佐藤和子（女子美術大学客員教授、金沢美術大学名誉客員教授）

申込受付開始：6月23日〔火〕 11:00 予定

2026年8月22日〔土〕

第2回「オブジェからの旅—1970年代のエットレ・ソットサス（仮）」

講師：池野絢子（青山学院大学准教授）

申込受付開始：7月21日〔火〕 11:00 予定

2026年9月5日〔土〕

第3回「エットレ・ソットサスの“魔法”と“デザイン”（仮）」

講師：杉本渚（本展担当学芸員）

申込受付開始：7月21日〔火〕 11:00 予定

時間：14:00–15:30（13:30 開場）

会場：アーティゾン美術館 3階 レクチャールーム

定員：80人

*事前申込制・先着順 *詳細は当館ウェブサイトにてお知らせします。
www.artizon.museum/program/

【開催概要】

展覧会名： エットレ・ソットサスー魔法がはじまるとき、デザインは生まれる
会 期： 2026年6月23日 [火] -10月4日 [日]
開館時間： 10:00-18:00 (毎週金曜日は 20:00 まで) *入館は閉館の 30 分前まで
休 館 日： 月曜日 (7月20日、9月21日は開館)、7月21日、9月24日
会 場： アーティゾン美術館 6階展示室
主 催： 公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館
後 援： 在日イタリア大使館

入館料 (税込) : 日時指定予約制 (2026年5月26日 [火] よりウェブ予約開始)

当館ウェブサイトよりご来館前にウェブ予約チケットのご購入をおすすめいたします。
空きがあれば当日でもご購入いただけます。

ウェブ予約チケット 1,200 円、窓口販売チケット 1,500 円、学生無料 (要ウェブ予約)

*中学生以下の方はウェブ予約不要です。

*この料金で同時開催の「瀧口修造」展をご覧ください。

担当学芸員： 杉本渚、田所夏子

アーティゾン美術館 〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2

Tel: 国内 050-5541-8600 海外 047-316-2772 (ハローダイヤル) www.artizon.museum

アクセス：JR 東京駅 (八重洲中央口)、東京メトロ銀座線・京橋駅 (6番、7番出口)、東京メトロ・銀座線/東西線/都営浅草線・日本橋駅 (B1 出口) から徒歩 5 分

同時開催

瀧口修造 書くことと描くこと

会場：アーティゾン美術館 5・4階展示室
主催：公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館



アーティゾン美術館は、5・4階展示室にて、「石橋財団コレクション選」として、近代を中心にコレクションを代表する作品を展示するとともに、「瀧口修造 書くことと描くこと」展を開催します。

石橋財団は、詩人で美術批評家の瀧口修造（1903-1979）による作品 163点を所蔵しています。本展では、1960年代以降に本格化した造形作品を、詩作や美術批評、展覧会監修など多岐にわたる活動の中に位置づけ、その意図や特徴を探ります。パウル・クレー、ミロ、コーネル、福島秀子、山口勝弘、草間彌生ら関連作家の作品も加え、約 130 点で構成します。

安齋重男《瀧口修造、自由が丘画廊、東京、1978年1月》1978年/1980年代前半、石橋財団アーティゾン美術館 © Estate of Shigeo Anzai

【広報用図版】

1点のみ掲載の場合は1ページに掲載の図版いずれかをお使いください。

掲載時には必ずクレジットをご記載ください。また、文字載せや作品のトリミングはご遠慮ください。

■図版は、下記サイトからダウンロードしていただけます。

<https://www.artpr.jp/artizon/sottsass2026>



■★のついた作品は著作権保護期間中です。ご利用については下記にご相談ください。

本プレスリリースについてのお問合せ先

アーティゾン美術館 広報課 松浦・小川・宮武

*一般の方のお問合せ先は 050-5541-8600（ハローダイヤル）です。

E-mail: publicity@artizon.jp

TEL: 03-6263-0132（広報課直通・誌面への掲載はご遠慮ください。）

〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2